

---

# 快斗のばか

たけま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

快斗のばか

### 【ZPDF】

Z9270D

### 【作者名】

たけま

### 【あらすじ】

快斗の自殺なんで、頼ってくれなかつたのよ… 香凜が快斗を救う。  
今、香凜が快斗に気持ちを伝える快斗はどうなるか香凜の運命は?

私は、今日の朝奏彩かなみとして聞いてはならない事を聞いてしまった。

青子ちゃんに彼氏が出来た事それは、快斗では無い事、そんな無い  
と思い青子ちゃんを探していると睡然とした青子ちゃんが彼氏らし  
い人歩いていた。

「おはようございます。青子さんに…確かに3年1組の寛裂聖貢輝君かんれきせいぐん けいくん」

「おはようございます。奏彩先生」

「青子さん快斗君知りませんか?」

「知りませんけど」

「と言つうか貴方達どう言つ関係ですか?」

「僕達つきあつてるんです。」「はあ…そうですか?」私はその日  
体の調子が悪いと言い教師として1週間の休暇を貰い、櫻井香凜は、  
事件の依頼で、1週間居ないと書いておいた。私は、探偵の感をフ  
ルに使い携帯を取り出しがそれが私のためにも快斗ためにもなら  
ないのでやめた、思い当たる場所をかけずり回る。そして、快斗と  
香凜として初めて出会つた場所にいた。

「何処いったのよ…家にも居ないし工藤君の家も博士の家も平次君  
の家いないしあの2人の探偵説得するの大変だつたんだよ。迷つて  
ばかりじゃ、変われない。」

「快斗が行きそうな所…あそこにいつてみるか」私が行き着いたの  
は黒羽盜一さんのお墓

「ねえ?盜一さん貴方なら知つてるでしょ?快斗は何処に行つたの  
よお願いだから教えてよ…盜一さん」その時盜一さんの声が聞こえた  
「キッドとして初めて出会つた場所」と聞こえた気がしたでも、幻  
聴だとは、思えなかつた。

「快斗」杯戸シティーホテルにも、いなかつた。

「何処にいんのよー快斗のばか」あつ、あそだ…青子ちゃんと快  
斗が初めて出会つた場所

「か……い……と……」私は、一瞬自分を失いそうになつた。

「快斗」手首が赤く染まつていて。私は持つていたスカーフで止血するバン

「触るな……」

「（パチン）快斗のばかなんで、なんで頼つてくれなかつたのよ……なんで、自分一人で抱えん込んでんのよ……」

「お前に何がわからんだよ。」

「分かるよ……だって、私は……貴方のことが好きだつたから……と言うか今も好き……でも、貴方の目はいつも青子ちゃんに向いて叶わない片思ひだてつ言われてた。」

「香凜」

「なにがあつても諦めないそんな快斗が好きだつた。今の、今の、快斗には、人前でマジックなんか出来ない……」

「香凜」いつの間にか私の頬には、透明の液体が流れていった

「私は、何時までも待つてるよ、いつもの快斗に戻るまで、その時も青子ちゃんに目が向いていたとしても、貴方が幸せならそれだけで私は、幸せになれる。だって、貴方の笑顔が大好きだから」多分……私の顔は真つ赤だう。

「じゃあ、伝えることは伝えたから……」（此所から快斗としてかきます。）それを言つと香凜は、走つて行つた。

「俺……なんて事したんだろう。」明日学校いつてみるか次の日学校が騒がしかつた。

「なにがあつたんだ？」

「おー黒羽ーこれはな、奏彩先生がやめるてつ言つてんだよ。1週間いなかつたのに……確か櫻井も、1週間近くおらんかつたんや」「まさか、俺を探すために……1週間も

「そうか」奏彩先生は、体が悪いから、教師をやめるらしい。

「奏彩先生有り難う。」

「こちらこそ有り難う」返つて来た答えにびっくりしながらも、笑顔で別れた。

「ば快斗今までどこいったのよ」俺は、変な嫉妬心がわいた  
「青子お前他の男の子と居んの見られたらふられるぞ…」

「（パチン）バカ」

「射つーな」殴られた相手は香凜だった。

「青子ちゃんは、あの人と別れてこの1週間貴方が帰つて来るのを待つてた毎日、毎日、私のせいだ、私のせいだ、てつ泣いてたんだからね。そんな青子ちゃんの気持ち理解して上げなさいよ。快斗のばか」

「本当なのか？青子」

「ごめんなさい快斗が好きです。」顔が熱い

「俺も…」はつと香凜を見ると笑顔でこう言った

「言つたよね。いつも快斗に戻つたとき例え快斗の日が青子ちゃんを向いていたとしても、貴方が幸せならそれで良いって…」

「香凜ありがとな」

「青子俺も青子のことが好きだ。」周りを見ると香凜はいつの間にか居なくなつて居た。その後先生に呼び出された。

「なんですか？先生」

「ああ…櫻井さんね、足怪我してて、走るのはドクターストップ出てるのに、貴方事夜遅くまで探してたのよ。帰つて来るのを待とうてつ言つても

「仲間を失う事になるくらいなら足の怪我なんてどうでも良いてつ言つて」聞かなかつた。いろんな場所かけずり回つて、やつとの思いで見つけた貴方は自殺しようとしていた、貴方の腕の止血にスカラフ使つたてつ言つての…後で紫稜さんから聞くと亡くなつたお母さんの形見らしくてかなりお怒りになられたそいよでも、あの子

「あのスカラフが母さんだからてつ使うのためらつてたらお母さん喜ばない…使って正解だつたてつ掛け替えのないたつたひとつの大好きな、大きな、宝物を救う事が出来たんだ。」てつ…それだけじゃない貴方のそばに居たのになんで、気がつかなかつたんだろうてつろくに食事も食べれなかつたらしいの…クッキーの欠片いえ…水

さえも戻したの病院に行つても原因は不明で、精神からくる物だつでも、貴方のせいにしたくなかったんでしょうね。彼女にも喋らなかつた。問いただしても首を横に振つた最後には自白剤を使つたでも、それでも、あの子は震えながら絶対に言わなかつた。彼女のためにも青子ちゃん幸せにしなさいよ。」「先生今日俺早退します。…香凜を櫻井香凜を元に戻します。」

「はいはい…行つてらつしゃい。」その頃香凜は、杯戸シティーホテルの屋上に居た

「これで良かつたんだよね？お母さん…「ごめんね…スカーフ汚れたお父さんにかなり怒られたよ…でも、後悔はしてないよ…母さん」一方、快斗は

「家にも居ないし、心当たりは探したんだけど…あつ、まさか「探偵君と俺が初めて出会つた場所

「香凜ー」

「快斗？貴方なんで此所にいんのよ」

「良いからこれ食べろ」差し出したのは香凜の好きな苺  
「有り難う…美味しいんだけど…」「めんね…「ホホホホ」  
「くつそ、苺も食べれないのかよ…」

「先生からきいたんだ…」

「ああ呼び出されてな」

「言つとくけど私がこんなになつたからてつまた自分追い詰めて青子ちゃんの前から消えたらダメだよ…」そう言つて香凜はその場に倒れた

「…凜…香凜」

「ん…目が覚めたか？」

「誰？」は？まさか…

「今、医者読んで来るから…」

「体に異常はありませんね脳の方はまた、明日検査をしまじょい…」「なあ？香凜お前何処までおござつてんだ？」

「かり…ん？それが私の名前なの？」

「自分の名前まで…」（じーるーーまたそりやつて自分追記語めるば  
かこいつなったのはあんたのせいじゃないの）

「香凜？」（そだよ、今、心の中に閉じ込められてるの…）

「はあ？」（その子が全てを思ひ出すか私が此所からでるかひとつに  
ひとつやな）

「入るぞ黒羽」

「ボウズに平次」

「あのー誰ですか？」

「おー快斗まさか…」（もしもししロナン君平次君聞こえる？）

「なんやこれ？」

「テレパシーか？」（分からんけど…）

「あのー勝手に話を…うつ…」

「かりん」（やっと出れた。そのまま田嶋もあわ  
ん…快斗に平次君「ナン君」

「お前ばかか」

「いめんてつ」看護師が扉を開ける

「香凜さん夕食ですよ。」

「はー…」

「何や嬉しそうやないな…」

「おー服部来る時に説明しただろ。」

「やつたな…」

「いこんよ氣にして無いけん…おーしんやけどな…」ホホホホホホホ

ホ

「はあ…なんで、食べれんのやう…」

「香凜…」お粥でさえ一口が限界だった。でも、看護師さんは一口  
食べれたらそれで良い方らしい、熱が高い田は、一粒も無理らしい、  
だから、今は点滴で栄養剤を打つしか方法がない。ある田嶋舞いに  
行くと香凜は熱にうなされていたいつもなら点滴を打つたら下がる  
熱も40度越えが1週間続いた。

「はあはあはあ…」ホホホホホホホホ、俺は背中を擦る事しか出

来なかつた。

「また… そやつて… 自分を… 追い詰める… 快斗… のせいじやないよ… お願いだから… 死なないで… お願いだから… 生きていて… 快斗が… 居たから… 頑張れたんだよ…」

「香凜ごめんな」

「誤らないで… そんな… 快斗に… 「ごめん… なんて… 言われたくない… いよ…。」

「有り難うな香凜」

「それで… よりしき… 「ゴホゴホ」

「無茶して喋るからだぞ…！」 「「ごめんてつ」 次は日脳の検査の結果異常はなしらし。俺は持つて来た林檎をすりおろし蜂蜜をちゅとかけたんを出す。

「無理して食べんでいいんだぜ？」

「ううん、頂きます。ん… 美味しい」

「香凜大丈夫なんか？」

「うん、気持ちも悪くないし。」

「やつたな…！」

「ほんまよー頑張つたでー香凜」

「ちよと喜ぶのははやいんです。林檎がたべれた=全て食べれる訳じや無いらしいんです。」

「明日は、バナナやな…！」 次の日バナナもミキサーにかけたんを皿にのせて食べる

「ん… 美味しいんだけど… 「ごめん無理見たい」「ゴホゴホ」

「バナナは駄目かー」 「今の所林檎ぐらいか…」 探偵君が呟く

「ごめんね…」

「それより、快斗青子ちゃんのそばに居てあげな。見た目より結構純すいなんだから

「香凜…」

「私には、コナン君も平次君がいるし… 快斗が居なくとも頑張るよ… 今日から3日間休みでしょ？ 青子ちゃんと居てあげなよ… 私3日

間で、苺食べれるようになるから... 「ホホホ」

「そやで快斗」平次が香凜の背中を擦る

「行つてやれ香凜のためにもな...」名探偵が苺を細く切つて香凜に渡す

「ありがとね「ナン君」

「香凜...平次...ボウズ...ありがとな...俺行つて来る」

「うん、行つてらしゃい」

「ほんな

「じゃあな」

「香凜本当に良かつたのか?」

「うん...」私の頬には、透明の液体が流れていた

「さあ...苺食べるよ」

「ああ

「ん...「ホホホ」

「無理か?」

「無理しないでいいんだぜ?」

「約束したから3日間で食べるてつ」その頃快斗は

「青子トロピカルランド行くか?」

「うん」1日間トロピカルランドで楽しんだとか... 2日目香凜は

「香凜ー苺だぞ...」

「うん...有り難う」

「まだろくに飯食えんかー」

「うん...てつ平次君大阪に帰りてつ言つてじゃん...「ホホホ」

「あー大声出すな大丈夫や学校には許可貰つて来し...和葉もついて  
来たけど...な」

「こんにちは和葉さん」

「初めましてやな?香凜はん」

「香凜で良いよ。」

「ほんなら、香凜ちゃんてつ呼んで良い?うちの事は、和葉で良い

よ」

「恥ずかしいんで和葉ちゃんって呼ぶね」

「また、苺食べれるんか？」

「どうしたん? 平次

「アホ、来る時説明したやろ！」

「あつ、すまんなー香凜ちゃん」

「気にして無いから……ん……美味……」

「まだ一口しか食べて無いやんーー！」

「うん、体が言う事利かないんや。」

「櫻井」 平次君は和葉ちゃんが居るため私の二

「香凜ちゃん入るぜ」

「どうぞ決斗界に精子さん」

「また勘ぐったのか？」

「約束してないから」 ナンキーでジル=マリである。

卷之三

「うり難う　い　美　め　一　い　ジ　サ　ジ　な　ゴ　ホ　ゴ　ホ

「未」一曰「少次山無一也」

「ニギヤハニシテ、アリタマニシテ」

八

卷之三

「快斗君」香凜が俺を呼ぶ

「なんだ（パチン）」一名探偵と平次から毛手が飛んできたが真っ先

に当たつたのは番臺の平手だつた。

「射て！ なー俺が何した！！」

「いつもそうやって自分追い詰めて全て自分のせいにして……なんで他の人を頼らないのよ……快斗は1人じゃ無いんだよ?……仲間が居るんだよ?……快斗の馬鹿」香凜はそう言って病室を抜け出した

「櫻井一ボウズ追っかけ！」

「うん」分かつた平次兄ちゃん

「お前なあ……いい加減せえよ櫻井は毎日毎日お前が自分を追い詰めるんは自分のせいやてつ俺らが帰つてからずつと泣いとんやで……ど

うして、苺が食べれるようになりたいてつ毎日お前ためだけに頑張つたんやで…食べれるようになつてお前が元気に笑う姿が見たいなてつ泣いてたんや俺からも頼むは…香凜のためも相談してくれや」「快斗君うちもいつでも聞いてあげるで」

「ば快斗私にも話してよね」

「平次…和葉ちゃん…青子」

「服部…ハアハアハア…」

「工やのーてボウズ櫻井は?」

「病院中何処探しても見つからないだ…勿論屋上にも」

「何やで、手分けした探すで俺と和葉、ボウズと快斗…姉ちゃんは帰つて来たらあかんから病院で待つてくれるか?」

「うん、分かつた」

「香凜の奴調子良くないの?…」

「は?」

「あいつ朝飯も、戻してな。今日は熱が高かつたんだ。」

「あそこかもしれない…」向つたのは杯戸シティーホテル屋上

「風舞う花びらが水面を撫でるよう(劇場版名探偵コナン迷宮の十字路)エンディングテーマより)来たんだ…」

「香凜」

「ゴホゴホ…ゴホゴホ」香凜の口からでたのは赤い液体

「香凜ー ボウズ救急車だ。」

「うん」

「ボウズほんまか香凜が見つかつたて」

「ああ…」

「何処におんねん」コナンが指を指したのは手術室だった

「はあ~」

「香凜…吐血したんだ…俺の目の前で」「快斗は…香凜がどうしても付いて来てくれてつ言つから付き添いだ…もう、2時間も手術してんだ…」そのとき医者が出て来た

「先生…香凜姉ちゃんは?」

「もう大丈夫だよ。ボウヤはちょっと外してくれる?」

「うん」

「平次さんだったね」

「はい…」

「香凜さんの」両親に連絡して下さい。…それと快斗君のおかげで香凜さんの容体がよくなり手術が成功しました。」

「快斗やつたな」

「オメエじゃないと出来ない事だよ。」

「平次…」俺はいつの間にか泣いて居た…平次がそっと手を頭の上に置いて言つ

「ほな香凜のどこ行くか…」

「（コソコソ）入つて良いでしょうか？」

「入りなさい。」

「香凜のお父さん…」めんなれ…」

「ん…父さん？」

「香凜…」

「快斗に言つて、手術中ずっと手を握つててくれて有り難うてつ」

「分かつた伝えるから喋るな」

「平次君お医者さん呼んで来てください」

「快斗君…香凜が手術中ずっと手を握つててくれて有り難うてつだと伝えてらしい。」その後半年間毎日の努力によって香凜は元どおりになつた。

(END)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9270d/>

---

快斗のばか

2010年10月8日15時51分発行